

書評

橋川文三 (1995)〔新装版〕『増補 日本浪漫派批判序説』未来社

— 日本的回帰の一つの在り方 —

藤 田 昌 志

橋川文三(1995)〔新装版〕『増補 日本浪漫派批判序説』未来社

— 一个日本回归的样式 —

FUJITA Masashi

【摘要】

橋川文三(1995)〔新装版〕《増補 日本浪漫派批判序論》未来社

— 一种日本回归方式 —

橋川文三作为“战中派(指日本第二次世界大战结束后十八、九岁到二十二、三岁这一年龄段的年轻人)”一员,战后在思考与探寻那些死于战争的同龄人与自身的关系中度过了一生。他重新考察、论证了二战时日本浪漫派这一从精神上深深吸引了自己这一代年轻人的文学流派,撰写了《増補 日本浪漫派批判序論》一书。在该书中,桥川就其这一代年轻人为何被日本浪漫派所吸引进行了深入的考察与论述,见解深刻,同时从时代变迁与日本浪漫派的关系这一角度诠释了这一原因。

キーワード：战中派 日本浪漫派 イロニイ 自然 米作

1 橋川文三氏について

橋川文三氏は丸山眞男氏の弟子であるが、战中派と戦後派の違いということ以上に、1945年の敗戦(終戦)以前と以後についての考え方が異なる。丸山眞男氏は日本の戦前の「超国家主義」(=ファシズム)と戦後民主主義の断絶を強調したが、「战中派」(=敗戦時に10代後半から20代前半の青年期であった世代を指す)⁽¹⁾の橋川氏は「戦前に一定の人格形成を終えていた丸山や竹内の世代」とは異なり、「物心ついた時から戦争の中にいることを余儀なくされ」、「マルクス主義など社会を批判的に分析する学問に触れる機会を持たない世代」⁽²⁾であり、「彼らの多くは戦争こそが正常であり、平和の方が異常であるという感覚を抱いていて」、「しばしば「戦死」への憧れ」を語り、そのような「世代感覚」が「戦後、前世代への反

発となって表れ」た。戦中派の代表的存在には評論家の吉本隆明や作家の三島由紀夫がいる⁽³⁾。

同じ戦前派でも竹内好は丸山眞男と異なり、「超国家主義」=ファシズムの「内部から批判を試みるための視座を採」った⁽⁴⁾。もっとも、私の考えでは、竹内好は中国礼讃論者で、このことは近代日本・現代日本否定論者と表裏一体の関係にあり、竹内好は主観唯心論者である。第一、中国語が読めない。竹内好の魯迅作品の日本語訳は何らの客観的語学知識、語学的見識にもとづくものではない。日中対照表現論三部作を上梓した筆者にはそのことがよくわかる。竹内の主観教条性はとりもなおさず、日本の中国観の一方の極を代表している。竹内好は中嶋嶺雄の『現代中国論』の書評を書くことを依頼されても書評できないと言った人である。竹内好は文革不可知論の立場をとり、直接、文革について言及することはなかったが、心情的には文革に傾斜していた⁽⁵⁾。

現在の時点から見ると、竹内好は中国「尊崇」論者にすぎない。とはいえ、橋川氏は竹内好に中国語を週一回習い、親しかったし、丸山のように戦後民主主義論者ではなく、自分の生きた同時代の戦争について自己の問題として考えた竹内好へのシンパシーは強いものがあつたのは確かであろう。

橋川の1945年敗戦時の心境は「敗戦前後」という文章の末尾に表明されている。

終ったとき、ながいながい病床にあった老人の死を見守るときのように、いわれのない涙が流れた。その時思ったことは二つだけある。— 一つは死んだ仲間たちと生きている私との関係はこれからどうなるのだろうかという、今も解きたい思いであり、もう一つは、今夜から私の部屋に灯をともしることができるのかという、異様なとまどいとの思いであつた。 「敗戦前後」⁽⁶⁾

橋川氏は死んでいった者と生き残った自分の関係への「解きたい思い」と、死ぬと思っていたのに生きていかなければならない者の「とまどい」の思いを持ちながら、戦後を生きていったのである。橋川には諸手を挙げて戦後民主主義を肯定することはできなかったし、また生きていく以上、何らかの「仕事」をしなければならなかった。そうした橋川がした「仕事」の一つが本書評で扱う「日本浪漫派」の再考察であつた。

橋川の日本浪漫派に対する関心は二重の構造を持つ。「一つは、いうまでもなく、日本ロマン派という精神的異常現象の対象的考察への関心であり、もう一つは、その体験の究明を通して、自己の精神的な位置づけを求めたいという衝動」⁽⁷⁾である。後者の関心は「いわば私の世代的関心ともいえるものである」(同)という橋川は「外」からだけでなく、「内」

から、なぜ自分が日本浪漫派に「いかれた」⁽⁸⁾かを明らかにしようとする。

本書は〔新装版〕増補であるが、1960年の初版では「耽美的パトリオティズムの系譜」という副題が付いている。このことについて、橋川はナショナリズムという政治学的用語を避ける意味もあったとしている⁽⁹⁾。自由民権思想の上に成長したのが近代ナショナリズムであるというのが橋川の考えるナショナリズムであるから、その点からいえば、日本浪漫派は耽美的(日本の古典)美尊重の日本回帰的原始感情を基本としているということになる。保田興十郎には事実、奈良や桜井で生まれ育ったことへの「郷土ショービニズム」⁽¹⁰⁾(郷土偏愛主義)がある。

2 時代の挫折感—明治の終焉と昭和7、8、9年—と石川啄木、日本浪漫派

日露戦争で国家の幻滅を感じた多くの中間層は日比谷事件を起こし、文芸上は自然主義が流行した。それは「脱愛国、脱国家の衝動の蔓延」であり、「明治国家」の終焉の始まり⁽¹¹⁾であった。昭和7、8、9年は数次の経済恐慌と社会主義運動の解体の中で、「農村を基盤とする我国中間層が未曾有の解体を経過した」⁽¹²⁾時期で、この時期にも人々は時代の挫折感を味わった。もっとも啄木が感じた時代の挫折感と日本浪漫派が勢いを持った時期のベースにある、人々の挫折感には違いがあると橋川は言う。

私がここでいいたいことは、啄木が感じた時代の「性急な思想」の中には、いうまでもなく国民的規模におけるある無力感が現れていたが、ただそれは純粋なイロニイとして現れるまでにはいたらなかったのに対し、日本ロマン派の場合には、時代の挫折感と中間層の規模の拡大に対応して拡大され、したがって、その無力感はより過激とならざるをえなかったということである。いわばその表白は、「自己自身の無力の深刻に正当な荘厳な告白」、「自己自身に対する嘲笑」(ハルトマン)というイロニイのレベルにまで激化したということである。したがって「日本浪漫派はここに自体が一つのイロニーである」という「広告」の言葉は、私にはたんなる高踏のポーズではなく、奇妙にこみ入った文脈においてはであるが、我国における「強権」の発展過程と、それにたいする反体制的底流の相互関係の中に正当に位置づけてしかるべき発言と考えられるのである⁽¹³⁾。

橋川氏は日本浪漫派を「強権」の発展過程の中での「反体制的底流」に位置づける。この本は単なる日本浪漫派批判の本ではなく、なぜ戦争中に橋川氏ら青年が日本浪漫派に「いかれた」かを謎解きする本なのである。イロニイとは橋川氏の文章ではわかりにくい、

要は軍部や政治的「強権」に対して、真っ向から反対することの出来なかった当時の状況にいた青年が共感した、「日本の古典美」や「日本回帰」によって、政治に対する美の優越という日本の精神的伝統を以て、悪しき現実を「俯瞰」した、「無限の自己否定」として自己を主張した日本浪漫派の文明批判⁽¹⁴⁾のエトスのことであろう。橋川は象徴的に言う。「私たちと同年のある若者は、安田の説くことからの究極の様相を感じとり、古事記をいだけただ南海のジャングルに腐らんとした屍となることを熱望していた!少なくとも「純心な」青年の場合、保田のイロニイの帰結はそのような形をとったと思われる。これは甚だしくナチズムの心理構造とことなる形である。ナチズムのニヒリズムは「我々は闘わねばならぬ!」という呪われた無窮動にあらわれるが、しかし、私たちの感じとった日本浪漫派は、まさに「私たちは死なねばならぬ!」という以外のものではなかった」⁽¹⁵⁾。

3 農本主義 自然 本居宣長 米作

農本主義と日本浪漫派は反近代主義の点で共通しているが⁽¹⁶⁾、「政治」と「制度」の解釈で差異があり、「その背後には、両者における「自然」もしくは「神」の理念に関する相違があったといえるであろう」⁽¹⁷⁾と橋川は言う。

通常、農本主義は明治の為政者によって家父長的国家観のイデオロギイ的支柱をなすものとして「富国強兵策のためにとられた農の尊重」⁽¹⁸⁾であったが、保田與十郎の農業生産の理念は「テオクラティック(筆者注:神権政治的)な無政府主義」(同)ともいうべき思想であり、保田は「政治」という儒教的理念の本質を「支配」ととらえ、封建時代に儒教理念と妥協し、明治以降は近代主権理念と妥協して、「政治」への屈服を表現した「俗流」祭政一致思想を批判する⁽¹⁹⁾。

本居宣長における、その「みち」の具体的根源とされた「事跡」に対応するものが、保田の農本思想における「米作」理念であるとして、橋川はその前提となる宣長の自然神論について説明している⁽²⁰⁾。橋川によると、宣長は人為的規範であるとして、朱子学的合理主義による世界構成を斥けるとともに、人為的規範を否定する老荘的自然哲学についても「その自然は真の自然にあらず、もし自然に任すをよしとせば、さかしらなる世は、そのさかしらのままにてあらんこそ、真の自然には有べきにそのさかしらを厭ひ悪むは返りて自然に背ける強事なり」(「くずはな」下)と否定する⁽²¹⁾。

儒教的天の理念、老荘的自然の理念、旧神道におけるそれらの折衷的理念のすべてを否定して、宣長は「新たに倫理的なテオゴテイもしくはエスノジェニイを工夫しなければならなかった」⁽²²⁾と橋川は言う。そして、宣長の終局的なよりどころとしたのが「理」に対する神々の「事跡」の実存⁽²³⁾ということであり、宣長はあるかないかはっきりしない

中国の天命説とは異なる「御国にて神と申物は、さらに仮の名にあらず、ことごとく実物なり」というところに、一切の規範化と観念的絶対化を排した「この道」の構想を樹立したのである⁽²⁴⁾とし、橋川は宣長の「事跡」に対応するものが保田の農本思想における「米作」の理念であった⁽²⁵⁾と述べている。それは「米作生活の中にある道」(保田『日本に祈る』所収「農村記」⁽²⁶⁾)であり、生活と生活の中に貫かれている「神の道の実相感」、そして「万世一系と天壤無窮」(同上⁽²⁷⁾)の実感である。橋川や当時の青年が「いかれた」のはおそらく、こうした現実の強権的で低劣な政治、日本の国権を超えたところにある「万世一系と天壤無窮」の実感、日本の「美」であったのであろう。そこにしか己の死ぬ意味を見出せなかったのであろう。

4 政治に対する美の原理的優越

日本の精神風土において「美」が越権的な役割を果たしてきて、西欧社会の神の観念のように、普遍的に包括するものが日本の美であった、そして「日本の生活と思想の内面には、政治に対する美の原理的優越ともいうべきものが見られるとさえ考えられるのである」(七 美意識と政治⁽²⁸⁾)と橋川は述べている。橋川は日本では「政治」は「既成事実」としてとらえられ、政治過程は一種の自然過程(既成事実への屈従過程)となる⁽²⁹⁾としている。政治意識の美意識への還元は「自然」観念を媒介として成立し、「さかしらのままにある」自然への宣長の肯定は、人間的自然と自然的自然の未分離を意味し、そこでは政治は権力(筆者注:支配、被支配)としてではなく「非政治的自然としてあらわれることによって、はじめから抵抗の対象たりえない」⁽³⁰⁾。ヨーロッパの自然概念と異なり、日本の自然は人間的欲望(主情主義)の展開として考えられ、このような自然概念の支配する精神風土では、政治状況は自然状況と同一視され、政治はある「自然」な無窮運動のごときものとして表象され、それは丸山眞男のいわゆる「縦軸の無限性によって担保」された無限定な価値の流出―産出の形態にほかならない⁽³¹⁾と橋川は説明している。

5 橋川(1995)の問題の所在と現代的意義

橋川(1995)は「戦中派」として日本浪漫派に「いかれた」自分たち、かつての青年の心情を「外」からではなく「内」から本書で考察している。当時の青年には死んでいく糧として日本浪漫派の日本回帰や古典美が必要だった。「国粹」「国体」と当時、叫ばれた政治的なものとは異なる精神の糧がなければ当時の青年は死地に赴けなかったのである。本書は日本浪漫派を解明することによる、日本浪漫派を糧として死地に赴いた青年たちへの鎮魂歌の意味も持っている。「批判」であるから橋川はもちろん日本浪漫派を賛美してはいな

い。橋川は日本浪漫派の解明により、二度とああした青年たちが出ないことを願っているようである。

保田の「米作」の理念は網野善彦氏による農民以外の非定住の人々である、中世の職人や芸能人などの漂泊民の世界があったことの解明によって、日本が決して天皇を頂点とする均質な農民国家でなかったことが明らかになったのであるから、現在では説得性を持っていない。

「自然」観については西洋では古代ギリシアの人間を包み込む自然観の後に、キリスト教の神と人間による自然支配観が主流になり、自然科学が確立されていったのに対して、東洋、なかんづく中国では儒教の「自然嫌い」、道教の「無為自然」の尊重、仏教の中でも唐代仏教の草木と土石に仏性可能性を肯定したことなどが自然観との関係で指摘できるが、日本では「オノヅカラ」としての自然観が存在し、近代では自然と自己が一体の伝統的自然観と西洋近代の自然観をどう関係づけるかが問題となった。

橋川はすでにみたとおり、日本の自然は人間的欲望(主情主義)と考えられ、政治は自然と同一視されていると述べている。「自然」観念を媒介とした政治意識の美意識への還元が成立しているとしているが、それは政治が西洋のように権力(支配、被支配)としてではなく「現実」の「ありのまま」の「政治」がすべて受け入れられるということであろうか。そんなことはないのではないか。日本人はただ「変化」を「自然」の本質と考えているのではないか。移ろいゆく自然を愛でている日本人。正確に言えば、「変化」の循環を「自然」と考え愛でているのが日本人なのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 平野敬和(2014) p.27
- (2) (平野敬和(2014) 同)
- (3) (平野敬和(2014) 同)
- (4) (平野敬和(2014) p.21)
- (5) (藤田昌志(2015)『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』p.92 馬場公彦(2010)『戦後日本人の中国像 日中敗戦から文化大革命・日中復興まで』新曜社 pp.265-266 p.597)
- (6) 「敗戦前後」橋川文三(1995) pp.266-267
- (7) 橋川文三(1995) p.14
- (8) 橋川文三(1995) p.25
- (9) 橋川文三(1995) p.87
- (10) 橋川文三(1995) p.81

- (11) 橋川文三(1995) p.229
- (12) 橋川文三(1995) p.31
- (13) 橋川文三(1995) p.53
- (14) 橋川文三(1995) p.52
- (15) 橋川文三(1995) pp.42-43
- (16) 橋川文三(1995) pp.72-73
- (17) 橋川文三(1995) pp.73-74
- (18) 橋川文三(1995) pp.74-75
- (19) 橋川文三(1995) p.76
- (20) 橋川文三(1995) p.79
- (21) 橋川文三(1995) p.77
- (22) 橋川文三(1995) pp.78-79
- (23) 橋川文三(1995) p.78
- (24) 橋川文三(1995) pp.78-79
- (25) 橋川文三(1995) p.79
- (26) 橋川文三(1995) p.79 保田與十郎『日本に祈る』所収 「農村記」
- (27) 橋川文三(1995) p.80
- (28) 橋川文三(1995) p.94
- (29) 橋川文三(1995) p.97
- (30) 橋川文三(1995) p.97
- (31) 橋川文三(1995) p.98

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 平野敬和(2014)『丸山眞男と橋川文三 「戦後思想」への問い』新曜社
- (2) 藤田昌志(2015)『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』晃洋書房
- (3) 馬場公彦(2010)『戦後日本人の中国像 日中敗戦から文化大革命・日中復興まで』新曜社
- (4) 橋川文三(1995)〔新装版〕『増補 日本浪漫派序説』未来社